

## 誰でも作れる牛用頭絡

本間秀彌\*

筑波大学生命環境科学研究科,  
305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

### 要 旨

頭絡は大型の家畜である牛の行動をコントロールする為の重要な作業具である。しかし、その作成方法に関する資料は極めて限られており、誰にでも直ぐに役立つ実用的なものは見当たらない。頭絡には使用目的に応じて繫留型と調教型があるが、その中の代表的なものをそれぞれ一つずつ取り上げ、作成手順を分かりやすく図解した。

キーワード：牛、繫留型、頭絡、調教型

### はじめに

牛は家畜の中でも大型の動物である。ホルスタイン種の体重は成雌牛でも600kg以上になることから、これを素手で取り扱うことは極めて困難であるばかりでなく、危険でもある。このため、古くから、牛や馬などの大型家畜には、頭に頭絡を装着することで取り扱いを容易にしながら管理者の意に沿うようにコントロールし、安全で効率的な管理を可能にしてきた。頭絡は牛の調教や繫留・移動、獣医による検査や治療などの他に、実験として用いる場合、試料採取や各種測定時の保定など、大動物を管理する上で必須の作業具である。

牛用の頭絡は一般に親から子へ、地域の先輩農家から後輩へと作り方が伝承されているようであり、地域によっては、その呼称も「もくし」とか「無口」などと呼ばれている。また、簡単なものから複雑なものまで少なくとも10種類以上あると言われている(吉川 1990)。しかし、近年、酪農家の個数の減少に加えて頭絡の代わりに鼻環を用いて管理する農家も多いことから、頭絡の作り方を知らない酪農家も増えてきている。また、鼻環では、牛が繫留から離れて逃げた際に簡単には捕まらない場合が多い。

頭絡には使用目的の違いによって繫留型と調教型(引綱型)の2種類あるが、主に、その地域や農家などで伝承されている作成技術が継承されているにすぎない。この為、その作り方を丁寧に解説した文献や資料も限られている(村上 1987, 吉川 1990)。そこで、繫留型と調教型の頭絡の中から、それぞれ代表的なものの一つずつ取り上げ、その作成手順と要領を誰でもが作れるように平明に解説した資料として保存し、この技術の継承と普及に役立てることにした。

---

\* Corresponding Author: buf7falo@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

## 繫留型頭絡の作成手順

繫留型の頭絡は、牛を容易に捕まえることが出来るように頭に常時装着しておくものであるが、鼻環代わりに簡単な保定にも役立つ。常に装着しておくため、牛の頭皮に負担がかからないように、ロープの太さや材質に気をつけるばかりでなく、美しく見栄えがするように気を配ることも大切である。この型の頭絡は飾り結びの一つである「三輪結び（新橋結び）」3回と「一重結び」2回の二つの結び方を組み合わせて作り、最後に「一重結び」を用いて装着する。

### 1. ロープの用意

皮膚に一番優しいロープの材質は綿製であるが、高価なので、ナイロンかビニロン製が材質と価格の面で手ごろである。ポリエステル製や麻製は硬い材質であり、常時装着しておく頭絡の材料としては適当ではない。ロープは太さ6 mm、長さ9 m（成牛用）のものを用意し、これを中央で二つ折りにして一本のロープのように取り扱う。

### 2. 三輪結び（新橋結び）

繫留型頭絡の作成には、先ず三輪結びを完全にマスターすることが重要である。この結びは、通常、右利きの人は左掌上で作るが、左利きの人が右掌上で作る場合は作成手順と仕上がりは右利きのものとは完全に左右が反対となるので注意する。ここでは右利きの人が左手のひらで行う作成手順を説明する。

### 3. 一番目の三輪結び

- 1) 先ず、ロープの両先端をビニールテープで軽く1・2回巻きロープが作業中に解れるのを防ぐ。
- 2) 次に、両先端をそろえ二つ折りにする。この際、ロープを2・3回しごきながら、ねじれ癖をなるべく取り除くようにする。
- 3) 二つ折りにした中央を右手親指に引っ掛けて垂らし、そこから約50cm位離れた所に2本そろえたロープの内側に左手親指を入れ、人差指を伸ばし、残り3本の指で握る（図1）。



図1 ロープの中央を右手親指に掛け50cm位下方を左手で握る。

- 4) 右手親指に引っ掛けてあるロープの先端を左手人差指に引っ掛けて再び握る。すると、人差指の左右に一つずつ約23cm位のループ（蛇口）ができる（図2）。ここまでが三輪結びの準備である。
- 5) 次に結びを開始する前に、手のひらの中で二本の対になっているロープが三方向（ロープA：小指の方向、ループB：中指と人差指の間、ループC：親指と人差指の間）に平行になっており、決して折り重なっていないことを確認する（図3）。
- 6) 結びの最初はA方向にあるロープを左手小指の少し下あたりを右手で握り、持ち上げながら、左手のロープが握られている小指、薬指、中指の上を通り、開いている親指と人差指の間のCの右横に乗せながら垂らし、人差指の根元のAのロープの上に軽く親指を乗せてロープAとループCがこの部分で動かないようにする。この親指を乗せた部分がこの結びの中心になるのでぐらつかないように注意する。垂らしたロープAはループBとループCの中間にあることを確認しておく（図4）。
- 7) 次に、Bの先端を右手でつまみ、左手首の方向に強く引きながらループBの根元を左手中指、薬指、小指の三本で握り、残りは小指の下に垂らす。人差指は伸ばしたままにしておく（図5）。
- 8) 最後にループCの先端をつまみ、持ち上げながら親指の上を通り、三本の指（中指、薬指、小指）の周りにできたロープの輪の上から下の方向に突き通し、強く下へ引っ張る。



図2 人差指の左右にループをつくる（三輪結びの準備）。

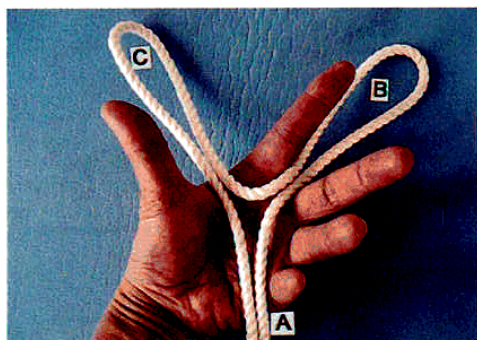


図3 三方向のロープにいずれも重なりがない（確認）。

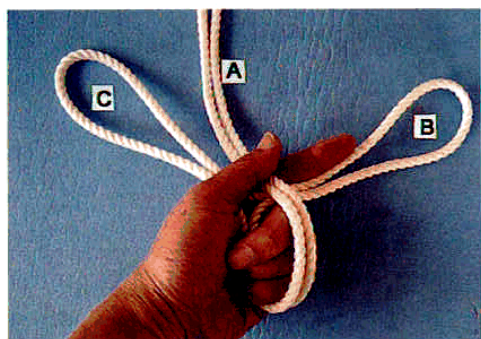


図4 ロープAを握り持ち上げて親指と人差指で扶む。

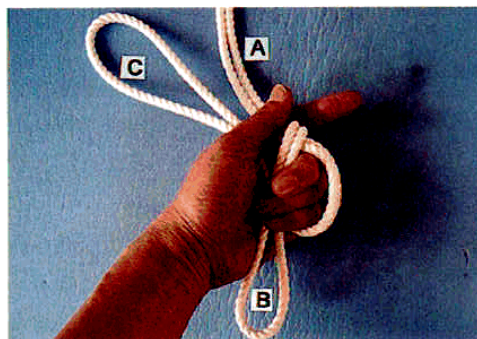


図5 ループBを下方に強く引き手のひらに握る。



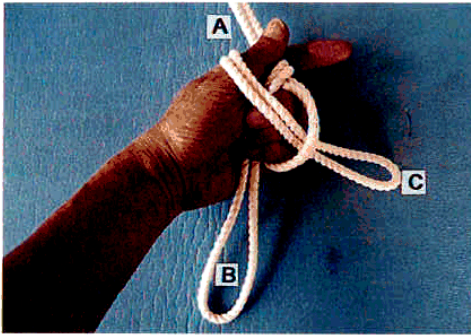


図6 ループCをロープAの輪に通す(三輪結びの原型)。親指と人差指には少し力を入れておく。

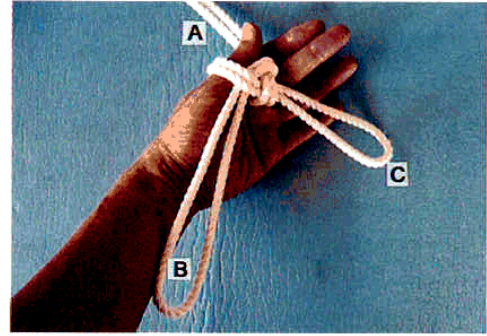


図7 ロープAを輪がなくなるまで上に引き上げる。



図8 三輪結びの完成(表側)。



図9 三輪結びの裏側。



図10 ロープの重なりが見られる「表」の誤った例(⇒)。



図11 ロープの重なりが見られる「裏」の誤った例(⇒)。

ここで三輪結びの原型ができる(図6)。

- 9) この後、結びを固くする作業になる。結びの中心である人差指の根元を親指でロープが動かない程度に強く抑えながら、握られている三本の指(中指、薬指、小指)をロープの輪から抜き、ロープAを右手で握り、上の方向にロープの輪がなくなるまで強く引く。
- 10) ループCの輪にある親指の先を手首の方に引いてロープの輪から抜き、ループCを下方

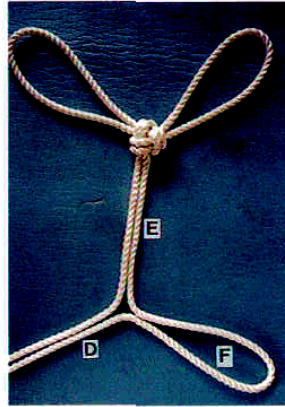


図12 二番目の三輪結びを作る準備、右側ロープのみでループFを作る。

に強く引くと三輪結びが完成する（図8）。この三輪結びには美しい飾り結びを示す「表」（図8）と比較的平坦な「裏」（図9）がある。表と裏に二本のロープの折り重なり（よじれ）がないことを確かめた後、さらに三方向に強く引っ張って固い結びにする。図10と図11はそれぞれロープが折り重なっている状態（よじれ）を示す「表」と「裏」の誤った例である。この場合次の手順に移る前に結びを緩めて必ず正しく補正しておく。

#### 4. 二番目の三輪結び

- 1) 一番目の三輪結びの「表」側を上側にし、そこから約25cm位の所の右側ロープのみを用い長さ25cm くらいのループFを作る（平らな床の上で行うと分かりやすい）。すると、この部分で、一番目の三輪結びのあるループEと、残りのロープDとそれぞれ三方向に分かれることになる（図12）。そして、ここでも三方向に分かれた二本のロープが平行で、決して重なり合っていないことを確認する。
- 2) 次に、ループFを左手の親指と人差指の間、ループEを人差指と中指の間にそれぞれ挟み、残りのロープDを中指、薬指、小指の三本で握り、鷲掴みするようにロープをしっかり握る。それから、手のひらを上に向けて全体をひっくり返し、その中に三方向に分かれた二本のロープが平行であることを確認する（図13）。更に、全体をひっくり返したことで、一番目の三輪結びの「裏」側が反転して上側に向き、かつ、左右が逆転したことに注意を払う。ここまでの二番目の三輪結びの準備である。
- 3) 一番目の三輪結びと同様に、一番長いロープDの小指の少し下あたりを掴み、握っている小指、薬指、中指の上を通り、親指と人差指の間に垂らし、そのロープの根元を左手の親指で軽く押さえる（図14）。
- 4) 次に、一番目の三輪結びのあるループEを左手首の方向に強く引っ張り、その根元を中指、薬指、小指の三本で握る（図15）。
- 5) 最後に、ループFを左手親指の上を通り握られた三本の指（中指、薬指、小指）の周りにできたロープDの輪の中に上から下へ突き通すように強く引く（図16）。
- 6) 結びの中心となる親指と人差指の根元のロープが動かない程度に強く押さえて、握られ



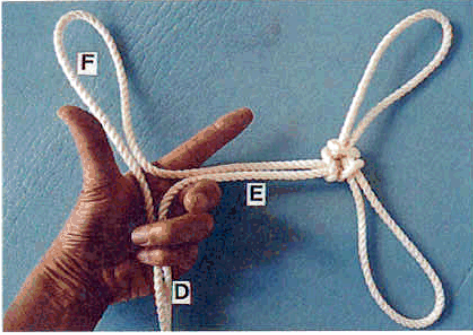


図13 ロープの三叉路を親指側と人差し指側に分けて手のひらに握り、全体を裏返す。

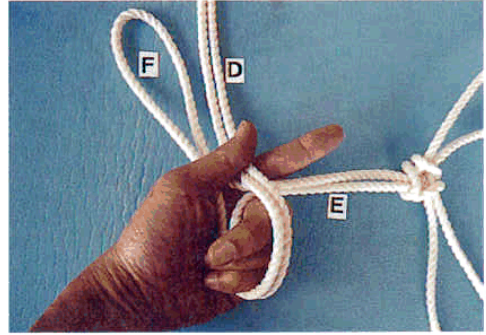


図14 ロープDを握り、持ち上げ、親指と人差し指で挟む。

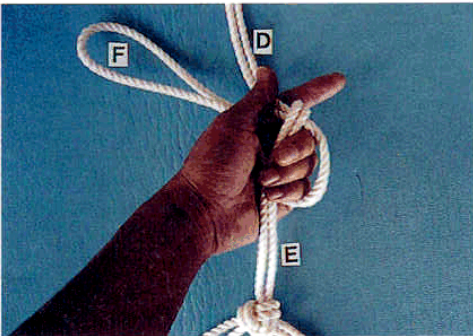


図15 一番目の三輪結びのループEを下方に引き、手のひらに握る。

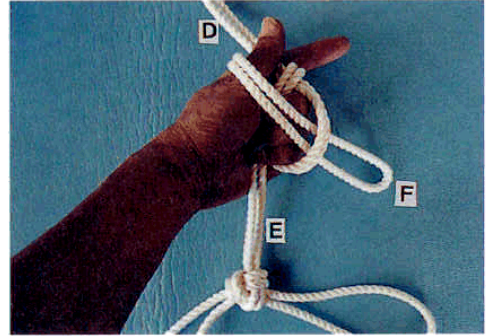


図16 ループFをロープDの輪に通す。

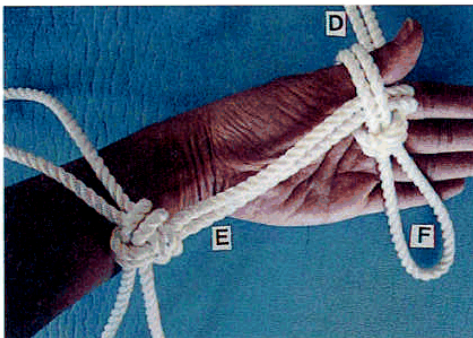


図17 ロープDの輪がなくなるまでDを上方に強く引く。

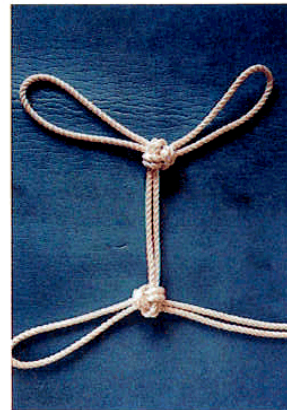


図18 二番目の三輪結び完成。

た三本の指（中指，薬指，小指）をロープの輪から抜き、ロープDを上方に輪がなくなるまで強く引く。（図17）。

7) 左手親指を輪から抜き、ロープFを下方に強く引くと二番目の三輪結びができる（図

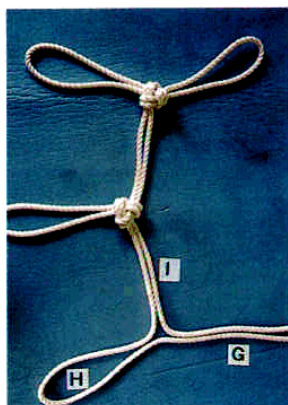


図19 三番目の三輪結びの準備、左側のロープのみでループHを作る。

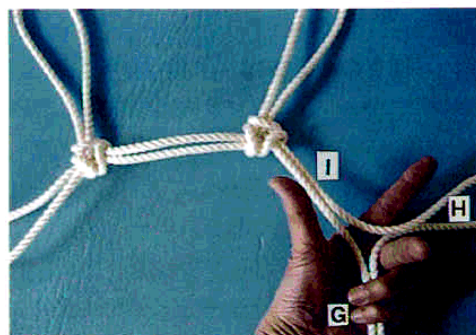


図20 ロープの三叉路を親指側と人差指側に分けて手のひらに握り、全体を裏返す。

18)。ここでのチェックポイントは、前回同様に結びの中に二本のロープの折り重なりがないこと、そして一番目と二番目の三輪結びの「表」と「裏」が、それぞれ同一面にあり、互い違いでないことである（図18）。これを確認してから次へ進む。

### 5. 三番目の三輪結び

- 1) 一番目と二番目の三輪結びの「表」側が上になるように床に置き、二番目の結び目から25cm離れた所の左側ロープのみを手繰り寄せ25cm位のループHをつくる。そして、三輪結びのある方をループI、ロープの先端側をGとする（図19）。ここで、テープを巻いたロープの両先端がほぼ同じ位の長さのなっていることを確かめる。
- 2) 親指と人差指の間にループI、人差指と中指の間にループH、そして、ロープGを中指、薬指、小指の三本で握り、ロープを上から鷲掴みしてから手のひらを上にする。一番目と二番目の三輪結びの「裏」側が床に上向きになっており、左右が反対となり、かつ、手のひらの中に三方向に二本のロープが平行になっていることを確認する（図20）。ここまでの三番目の三輪結びの準備である。
- 3) 次に、前回同様ロープGを小指の少し下あたりで持上げ、握られた三本の指のうえを通り、人差指の根元にあるループIの右横に垂らし、この上に親指で軽く押さえる。この際、三本の指の周りのロープは少し大きめの輪になるようにしておくことが大事である（図21）。
- 4) ループHを左手首の方向に強く引き、握られている三本の指の中でロープGと一緒に握る（図21）。
- 5) 最後に、人差指の根元を親指で動かないようにしっかりと押さえながら、握られている三本の指の周りのロープの輪の中に一番目、二番目の三輪結びの順でIを上から下に通す（図22）。
- 6) ロープを握っている三本の指をロープの輪から抜き、ロープGを上方へ輪がなくなるまで強く引く。
- 7) 親指を抜いてループIを下方に強く引くと三番目の三輪結びが出来る。ここでも二本の



ロープが平行で、重なっていないことを確認してからそれぞれ三方向に強く締めると三番目の三輪結びが出来る (図23)。

## 6. 一回目の一重結び

- 1) 三つの三輪結びの「表」側を上にして床の上に置き、一番目の三輪結びの左側ループ (赤) の先端上に二番目の三輪結びのループ先端を (青) 重ねて正三角形の形を作る。そして、三番目の三輪結び長い方のロープをこの上に重ねて二つ目の正三角形を作る (図24)。
- 2) ロープの先端を、重ねたループ先端 (赤・青) の少し下をくぐり二つ目の三角形の中にくぐり入れ、下から上に抜けて最後に二つの重なったループ先端 (赤・青) の上から下に通す。すると、同じ位の大きさの三角形が二つ並んでできる (図25)。この一重結びの表側は三輪結びに良く似た形になる (図26) が「裏」は異なる。

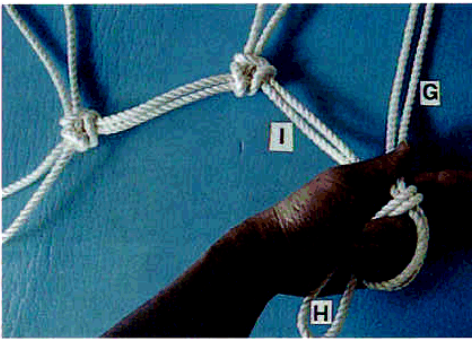


図21 ロープGを持ち上げて親指と人差指で挟み、次にループHを下方に引き手のひらに握る。

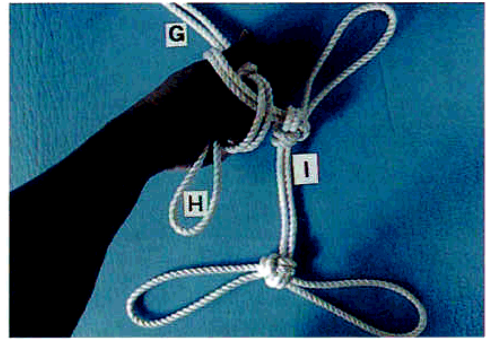


図22 ロープGの輪に一・二番目の三輪結びを通す。

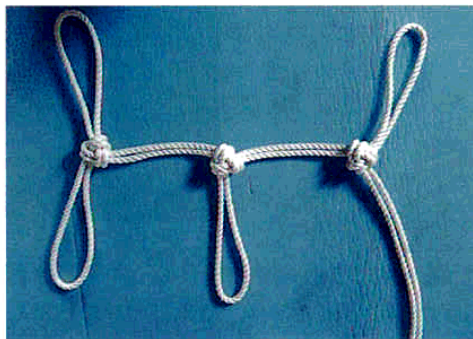


図23 三つの三輪結びの「表」側が同一面にある。



## 7. 二回目の一重結び

- 1) 一番目に作った三輪結びのもう一つのループの先端上に一回目の一重結びを終えたロープを重ね三つ目の同じ大きさの正三角形を作る (図26)。ループ先端の少し下のあたりに重ねてから下をくぐらせ三角形の中に入り、最後にループ先端にある輪の上から下に通す。三つの三角形がほぼ同じ大きさの正三角形になれば繫留型頭絡は完成である (図27)。

## 8. 牛への装着

- 1) 頭絡のサイズは牛の頭のサイズにぴったり合ったものでなければならない。大きすぎても、逆に小さすぎても作り直す必要がある。また、この頭絡には服を着せるのと同じように、美しく見える表側と比較的滑らかで皮膚に優しい裏側とがあるので、裏返しに着せないように注意する。
- 2) この頭絡は三つの正三角形が扇形に広がっており、一回目の一重結び (三輪結びに似ている) が扇の要になっている。中央の三角形に牛の口を通すと残りの三角形はそれぞれ左右の頬にくる。扇の要である一回目の一重結びは顎中央の真下にくる (図28)。



図24 一回目の一重結び (一・二番目の三輪結びのループを使って一つの三角形、二番目の三輪結びのループとロープを使って二つ目の三角形を作る)。



図25 ロープを一つ目の三角形の下を潜らせ二番目の三角形から出し、二つのループ先端に通す。

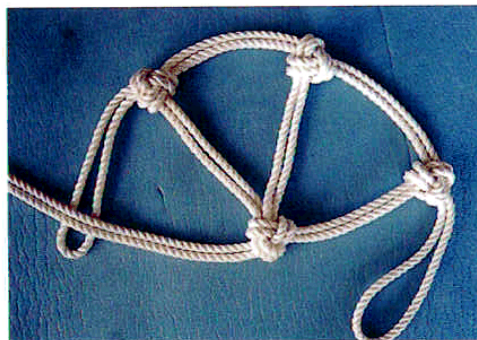


図26 一番目の三輪結びのもう一つのループとロープで三角形を作り、一重結びをする。

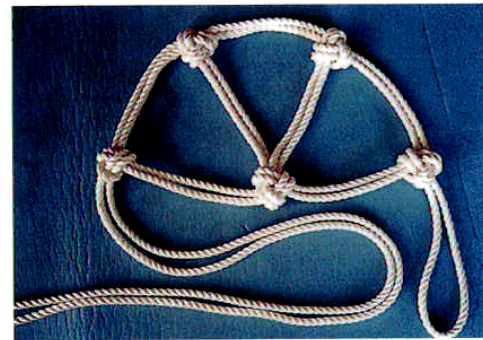


図27 繫留型頭絡の完成。



図28 繫留型頭絡の装着（三番目の三輪結びのループとロープで牛の頭の後ろで一重結びで装着する）。

- 3) 二本のロープの先端と三番目の三輪結びのループを牛の両耳の後ろに回し、頭の直ぐ後ろのうなじあたりで一重結びで装着する。余分なロープは切断し、先端が解れないようにビニールテープで止める。頭絡は装着して1週間経過すると緩んで外れ易くなる。最初からきつく装着することが大切である（図28）。

### 調教型（引綱型）頭絡の作成手順

調教型頭絡は牛の移動や調教などの時に用い、常に牛に着けておくものではないので美観や肌触りに特別な気を配る必要はない。しかし、調教や移動など比較的牛の嫌がる管理に用いるので、暴れると口の周りのロープが強く絞まる猿轡の機能を持ち、丈夫で制御力に優れている必要がある。この頭絡を作るには二種類のスプライス（本体の縄の撚りを一時的に緩めて、子縄を緩めた縄目に撚り込む技法）に習熟する必要がある。

#### 1. ロープの用意

安価で丈夫な麻製が適している。ナイロンやビニロン製は切れやすく強度に難点がある。ポリエステル製は硬くて滑りやすいので適当でない。ロープは太さ9 mm、長さ約4.5mのものを用意する。この長さで成牛と育成牛の両方に使用できる。

#### 2. クラウンノット

- 1) 切り取ったロープ先端の一方は必ずクラウンノットで解れ止めをする。予めロープを約10cm位まで解き三つの子縄に分ける。そして、左手のひらを上にして、中指と薬指の根元に解いた根元を挟む（図29）。
- 2) その後、左手の人差指で三本の子縄を手前（小指側）に2本、反対側（親指側）に1本になるように割り込ませる。この時、必ず三本の子縄の中心点が見えていることを確認する（図30）。解いた子縄が三方向に自然に分かれており、人為的にその位置を変えてはいけない。
- 3) 次に、一本になった親指側の子縄を人差指の上を通り手前（子指側）に引き寄せ、手前



の2本の子縄の間に割り込ませ、人差指の上の子縄を親指で押さえる（図31）。

- 4) 手前（小指側）にある左側（手首側）の子縄の先端を持ち、人差指に乗せた子縄に対して横に十文字になるように上に乗せ、重なった部分の子縄を親指で押さえる（図32）。



図29 クラウンノットの開始（中指と薬指の間に解いたロープを挟む）



図30 三本の子縄を手前2本、反対側1本になるように人差指で分ける。

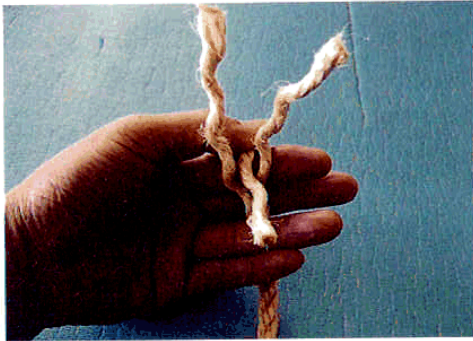


図31 手前側2本の子縄の間に反対側1本の子縄を割り込ませる。

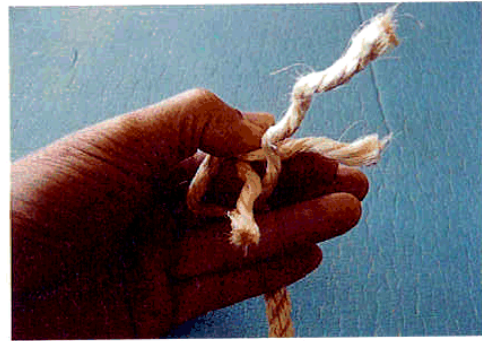


図32 手前・左側の子縄を、割り込ませた子縄の上に十文字に重ね、親指で押さえる。



図33 手前・右側の子縄を更に子縄の上に重ね、人差指を抜いて、その後でできる輪に右から左へ通す。



図34 クラウンノット完成（三本の子縄を硬く締める）。



- 5) 最後に残った子縄が前の二本の子縄の中間に立っていることを確認する (図32)。そして、二本目の子縄の上に、手前 (小指側) から反対方向 (人差指の爪側) へ十文字になるように乗せる (親指の少し先辺りで)。それから、人差指を最初の子縄から抜き、そこに出来た輪の中に右側から左側へ子縄の先端を通す。上から見ると三本の子縄が「三すくみ」になり、中央に小さな三角形ができる (図33)。
- 6) 三本の子縄を一本ずつ縄本体に沿って引っ張る。最初は全体を軽く締め、それから徐々に強く締めるとクラウンノットが出来る (図34)。クラウンノットの上面が、縄本体を垂直に立てたとき、これに対して水平でないと次の作業がスムーズに行かない。

### 3. バック・スプライス

- 1) クラウンノットだけではロープの解けを防げないので引き続きバック・スプライスに移る。まず、クラウンノットから垂れている三本の子縄のどれか一本を取り (図35では赤印の子縄)、その真下にある一番目の本体の子縄はそのままにしておき、二番目の子縄の撚りを緩め (クラウンノットを左手の指で固定し、右手の指で縄本体の撚りを右回りに回転させる)、緩んだ本体の子縄に左人差指の第一関節まで差し込む (図35)。
- 2) 差し込んだ人差指のひらに子縄の先端を乗せ、親指で挟み、親指で押し込むように子縄をくぐらせ (子縄の左上から右下方向に)、軽く引っ張る (決して強く引かない) (図36)。
- 3) 二番目の子縄 (青) も同様に縄本体の子縄に撚りこむ (図37)。三本の子縄 (黄) も同様に撚りこむ (図38)。それぞれ一段下の同一レベルに撚り込まれたことを確認したら一本ずつ本体に沿って硬く締める。この時、さらに硬く締めるために、撚り込んだ子縄を一本ずつ、いったん逆方向 (クラウンノットの先端側) に強く締め上げ、これによって出来た隙間がなくなるように本体の縄の撚りを戻し、その後、最初のように本体縄に沿って下方に強く引く。
- 4) 一段目の締めが終了したら、更に、もう一段、3) と同じことを繰り返して終わる。余った子縄は切り取ってもよい。

### 4. アイ・スプライス

- 1) ロープのもう一方の先端を予め10cm程解き、この子縄をロープ本体の縄目にアイ・スプライスで撚り込みループ (蛇口) をつくる。その内径は約3 cmとする。
- 2) 解いたロープの根元を右手の親指と人差指で持ち、ループの内径が3 cm (指が3本入る) となるように、ロープ本体の縄に一時的に重ねて、内径の大きさを確認する。この重ねた場所が子縄を本体の縄に撚りこむ場所なので左手の親指と人差指で爪を立ててしっかりと挟んだ後、右手をロープから離す (図39)。
- 3) 次に、左手親指の先から3 cmほど離れたロープ本体を右手の親指と人差指で強く挟みロープの撚りを戻し、緩んだ子縄に左手の人差指を第一関節まで入れておく (図40)。
- 4) 左手の人差指のひらに予め解いておいた子縄の一本 (赤印) の先端を乗せ、左手親指で押し込むように右下から左上の方向 (本体子縄に対して斜めに交差するように) に子縄の中央位まで通す (図41)。この段階ではこれ以上強く引っ張らない。
- 5) 残った2本の子縄のうち (青・黄)、二番目に本体の縄に撚り込む子縄は、解いた子縄の根元が上にある方 (青) である。



図35 バック・スプライスの開始（解いた子繩の真下にある二番目の本体子繩を緩め、指を入れる）。



図36 指の先に子繩を乗せ親指で押し込む。



図37 二番目の子繩も同様に本体に撚り込む。



図38 三番目の子繩も同様に本体に撚り込む（同じレベルに三本の子繩が揃う）。



図39 アイ・スプライスの開始（解いた子繩の根元を繩本体に重ね、内径3cm位の輪になるような位置を確認する）。



図40 子繩を撚り込む場所に人差指を入れる。

- 6) 一番目に撚り込んだ子繩の真下にある本体の子繩の撚りを戻して緩め、二番目の子繩を緩めた子繩の下から上に通し、子繩の中央位まで引っ張る。この時、一番目の子繩の「入口」の右側（あるいは真下）が二番目の子繩の先端の「出口」になることを確認する（図42）。また、三番目の子繩の先端が二番目の子繩の左側（内側）にあると巻き込むことになるので注意する。
- 7) 三番目の子繩も二番目の子繩の真下にある本体の子繩を緩め、下から上に子繩の中央あたりまで通す。二番目の子繩の「入口」右側（あるいは真下）が三番目の子繩の「出口」になることを確かめる。そして、三本の子繩が本体の同じレベルに撚り込んだことを確認したら（図43）、子繩を一本ずつ強く締め上げる（図44）。
- 8) 三本の子繩が同じレベルで繩本体に撚り込まれた状態は、丁度、クラウンノットから



図41 解いた子繩のどれか一本を人差指に置き繩本体に撚り込む。



図42 最初に撚り込んだ子繩の真下にある本体子繩を緩め、二番目の子繩を下から上に通す。



図43 三番目の子繩も同様に撚り込む。



図44 三本の子繩を硬く締め上げる。



図45 バック・スプライスの要領で更にもう一段撚り込む。



バック・スプライスに移行した工程と全く同じである。この後は、バック・スプライスの要領で二段ほど撚りこみ、余った子縄は切り落とす（図45）。

## 5. 子縄通し

- 1) ループ（蛇口）の根元から22cm（ループの先端からは25cm位）の所の本体の子縄の一本の撚りを戻して緩め、その中にバック・スプライスした先端を通し、先端のループと同じ大きさの輪を作る（図46）。
- 2) 通された本体の子縄と、通した方の縄が十文字に交わっている。この交差点から、通された子縄を新しく出来た輪の方へ1cm程ずらし、通した縄の交差点部の子縄を一本とり、これを緩めて、その中にループ（蛇口）を先端から通す（図47）。最後に、通したロープをそれぞれ強く引っ張ると輪の位置は固定され形も整う（図48）。

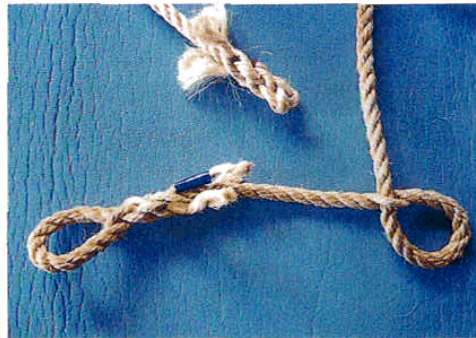


図46 子縄通しの開始（蛇口から23-25cmの位置の本体子縄を緩めバック・スプライスした先端を通し、蛇口と同じ大きさの輪を作る）。



図47 ロープが十文字に交差している場所で今度は、通した方のロープに蛇口を通す。



図48 子縄通しによる輪の完成。

## 6. 「の」の字結び

この結びの呼称は調べた文献中には見当たらないので（藤原 1975）、筆者が便宜的に用いているものであり、必ずしも一般的な呼称とはいえない。

- 1) アイ・スプライスで作ったループ（蛇口）を右手に、子縄通しで作った輪を左手に持ち、お腹のあたりに保持する。次に、残りの長いロープを自分の首の後ろへ左から右に回して前に垂らす。そして、バック・スプライスしたロープの先端をアイ・スプライスで作ったループの輪の上から下に通す（図49）。
- 2) 次に、長いロープの先端を首の下にできたロープの大きな輪の中に入れ、首から垂れているロープの上を右から左に横切り、輪の外に出してから、その先端をループ（蛇口）の下から上に通す。すると「の」の字の結びが出来るとなる（図50）。この結びは簡単に緩められるので牛の頭に装着した時ロープの輪の大きさを牛の頭の大きさに応じて迅速に変えることができる。
- 3) 最後に、バック・スプライスしたロープを子縄通しで作った輪に通して完成する（図50）。この部分は引っ張ると輪が小さくなる猿轡として機能する。



図49 蛇口にロープの先端（バック・スプライス）を通す。



図50 引網型頭絡の完成（「の」の字結びの後ロープ先端を子縄通しの輪に通す）。

## 7. 引網型頭絡の装着と取り扱い

- 1) アイ・スプライスで作ったループと「の」の字結びとの連結でできたロープの輪を牛の耳の後ろに引っ掛ける（猿轡側でない方）。サイズが合わないときは「の」の字結びを緩め、頭の大きさに頭絡のサイズを調節して合わせる。
- 2) 頭絡の二つの輪が牛の両頬にくるようにサイズを合わせ、猿轡が顎の下辺りに当たるようにすると最も制御力がある（図51）。これがあまり口の先端近くなると、牛が苦痛を感じもがいて、余計に暴れることもあるので注意する。
- 3) この頭絡を用いて牛を移動させる時は、牛の顔の前面と同じ方向を見て鼻の少し前方に立ち、牛の顔に近い手で猿轡の根元近くを持つ。そして、脇を固めて頭を軽く持ち上げ、その姿勢を維持する。そしてもう一方の手はロープの先端を握る（図52）。犬のリードの



図51 牛への装着（猿轡が顎の下にくる）。



図52 頭絡の持ち方（猿轡の根元を持ち、頭を上げさせる。もう片方の手はロープの先端を握る）。

ように長く持ち、離れていると牛の首の一振りで簡単に振り切られることが多い。また、牛が暴れて逃げ出す行動をとる時は、ロープを牛の真横（直角）に強く引き、自分を中心に円を描くように回転させ落ち着くまで待つ。後方に引いては決して暴走を止められない。いずれにしても、頭絡は牛と人間が互いに良い関係を築く為の「絆」であり、牛を管理する原点に通ずる作業具である。将来に渡って頭絡の作成方法が継承されることが期待される。

#### 引用文献

- 藤原覚一 1975. 結びの手帖 筑地書館  
吉川昭雄 1990. 結びの作業具・役に立つ牛頭絡の作り方. 酪農事情社.  
村上 保 1987. 畜産学習の手引き（改訂版）. 福島県高等学校教育研究会農業部会. p110-111



## How to Make Cow Halters

Hideya HOMMA\*

Graduate School of Life and Environmental Sciences (Agricultural and Forestry Research Center), University of Tsukuba, Tsukuba-shi, Ibaraki-ken 305-8572, Japan

### Abstract

A halter is a very simple tool made of the rope but an important implement to regulate cow behavior. However, available literatures on making a halter are limited and needed practical how-to articles described plain on making halters. There are two types of halters; one is the tie-up halter and the others the training one. This article focused on each one of the typical and most useful halter of two types and photographs in the article showed the process to make the halter from the rope. This article will contribute to succeed the skill to make a halter.

**Key words:** Cow, Halter, Tie-up halter, Training halter

---

\* Corresponding Author: [buf7falo@sakura.cc.tsukuba.ac.jp](mailto:buf7falo@sakura.cc.tsukuba.ac.jp)